ＮＰＯ法人申請中

2009年 2月10日

JSRC 会誌 創刊号

縄文柴犬研究センター

（会誌の愛称を募集中です。詳しくは 3 ページを参照してください。）

Natural Treasure shiba-inu Research Institute

(会誌の愛称募集中・3頁参照)

縄文柴犬研究センター

Natural Treasure Siba-inu Research Institute

会誌 創刊号

ＮＰＯ申請中

信条
1. 日本の文化遺産、縄文犬(柴犬)の保存をする。
2. 科学的な成果に学び、縄文犬(柴犬)の正しい見方、研究を深める。
3. 動物愛護の精神に則り、優しい仲間として相互に協力する。

もくじ

新しい空気　☆縄文柴犬研究センター理事長・新美治一（名古屋経済大学法学部・大学院法学研究科教員）- 2

ご協力よろしく！　☆JSRC 理事 事務局長・樫尾　豊 …… 3

シバとコロ-(1)　☆JSRC 理事・根深 誠(文筆家・釣り師・元登山家) …… 4

越冬するための犬小屋術-佐々木家の取り組み ☆佐々木俊幸 …… 6

東京大学所蔵のニホンオオカミ剝製標本 ☆JSRC 理事・藤井忠志(本州産クマゲラ研究会代表・岩手博物館) 8

縄文柴犬の見方-1　☆五味靖嘉 …… 10

おたよりコーナー　☆駒田さん　☆橘さん …… 11
☆武藤さん　☆天が来た・吉方さん　☆宮田さん　☆中山さん …… 12
☆吉崎さん　☆竹村さん …… 13

NPO法人の会計-主として税特例-　☆JSRC 理事 会計・石川辰雄 …… 14
報告 設立基金へのご協力、ありがとうございました。(諸料金一覧・血統登録について) …… 15

縄文柴犬研究センターの発足にあたって　☆JSRC 副理事長・橘　宏 …… 16
申請中 NPO法人「縄文柴犬研究センター」設立の必要性　☆JSRC 副理事長・五味靖嘉 …… 17

申請中 NPO法人 縄文柴犬研究センター　定款 …… 20
特定非営利活動法人 縄文柴犬研究センター設立総会 議事録 …… 23

縄文柴犬研究センター

会事務所　〒 014-0073　秋田県大仙市内小友字堂ノ前119-番地5

TEL 0187-68-2976(FAX共用)

http://www.sibainu-k.jp

郵便振替口座　02280－2－106951

Email: sibainug533@ybb.ne.jp

新 し い 空 気

縄文柴犬研究センター　理事長　新 美 治 一
（名古屋経済大学法学部･大学院法学研究科 教員）

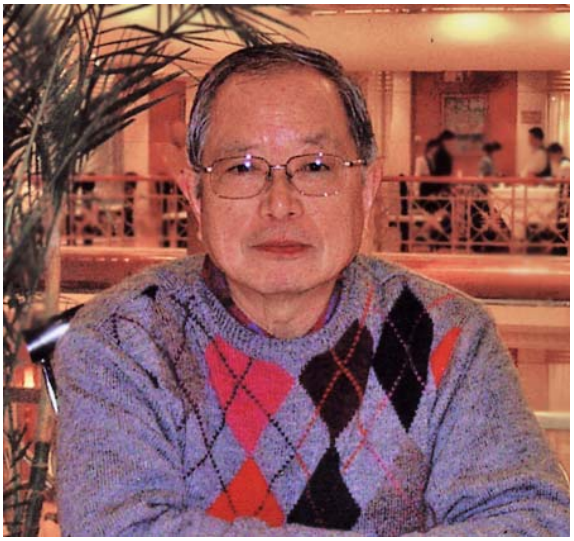
縄文柴犬研究センターの新たなスタートを会員の方々と、まずは心から喜びを分かち合いたいと思います。

理事長職には、身が引締まる思いです。会員の方々のご協力によって、このセンターが、縄文柴犬の文字通りのセンターになるように、五味さんに依拠しつつ、微力ながら頑張る覚悟です。よろしくお願します。

朝、身支度をはじめますと、庭の端の小屋にいる縄文柴犬の林（林王丸）が挨拶をよこします。力が湧きあがる瞬間です。誠にさわやかな1日の始まりです。

全てのことは、過去の積み上げがあると同時に、新たな営為を求めています。常にチャレンジです。期待に胸がふくらみます。自らの力で築き上げた実績は、未来への何よりもの宝です。洋々たる未来への確実な保障です。これに優る「礎」はありません。それと同時に、新しいものへのチャレンジは、大胆に、果敢に、しかも足を地につけて、仲間に支えられて、行なわざるを得ません。

縄文柴犬研究センターは、他のいかなる組織よりも、縄文柴犬についての実績があります。これは、私たち会員の一人ひとりが築いてきたものです。誰憚ることなく、縄文柴犬に親しみ、この犬たちを慈しみ、未来へとつなぐことのできる組織として、誇らしく胸を張って良い、と思います。そして、私たちの共同の力で、この組織を発展させることも求められています。



新しい組織です。希望に満ちた1日の始まりと同じです。からだいっぱいに新しい空気を取入れ、気持ちよく、ともどもに手を携えて頑張りましょう。よろしくお願いします。　（2009.01.18）

新美治一（にいみ　じいち）

1938年5月、愛知県阿久比村に生まれる。

10代後半から20代前半にかけて、東京教育大学〔現・筑波大学〕、モスクワ諸民族友好大学に学籍をおき、青春を謳歌する。

1972年4月、名古屋大学法学部助手

1977年4月、福島大学教員

1999年4月、名古屋経済大学教員。現在に至る

教育・研究テーマ

「憲法（日本国憲法）」、「国家と法（人権の歴史）」 ソヴィエト憲法史。現代日本の「人権の態様」（平和的生存権、表現の自由、生存権、勤労権）。 「憲法判例」を素材に現代日本の人権状況の検討。

著書には『日本国憲法の価値』（八朔社、2005年1月刊） の他、「ソヴィエト憲法史」に係わる論文多数。

学会・社会活動として、日本公法学会、比較法学会、民科法律部会に所属。 国内のいくつかの人権擁護関係団体に所属するなど、幅広い活躍をしている。（日本国憲法の価値ー八朔社を参考にしました。G）

シバとコロ (1)

根 深　誠　（文筆家、釣り師、元登山家）

柴犬だから単純明快にシバと呼ぶことにした。シバが生後3ヶ月でわが家にきてから4年が過ぎた。この夏がくれば早いもので5歳になる。弘前城の北門の向い側にある酒屋がシバの生家だ。石場家といって300年ほど続いた由緒ある住宅は国の重要文化財に指定されている。

シバの本名は古城獅子号。牡。小型犬なのに名前が猛々しい。性格も、人間には愛嬌を振りまいて従順なのだが、犬猫には狂暴である。猫と3回、犬と4回乱闘している。凍死していたニワトリを丸ごと１羽食べてしまった前科もある。

それもこれも私が甘やかして育てたからわがままになってしまった、というのが、わが家の定説になっている。これに対する私の反論は、人もペットも優等生をめざすような、まるで学校のセンセイみたいな画一的でいい加減なことを言うな、それが世の中を差別化する原因になっている、というものだ。こうした暴論は家族内でならともかく、公言でもしようものなら大顰蹙を買いかねない。

ネパールへ行ったとき(事情があって、この30数年来、ちょくちょく行ったり来たりしている)、わが家の飼犬の名前がシバであることをカトマンズ在住のネパール人の友人に話すと顔色を変えて言った。

「いけません。神様の名前を動物につけるものではありません」

私もこれには驚いた。そんなこととはつゆ知らなかった。文化や宗教など国柄が異なるとこうした齟齬が生じることになる。

ネパールはついこの前、2008年5月28日まではヒンドゥー教の王国で、国王はヒンドゥー教の3大神の一翼を担うビシュヌ神の化身と位置づけられていた。それが革命が起きて、建国以来約240年続いた王制が廃止され、連邦共和制に移行したのだ。

私が友人にシバの話をしたのはヒンドゥー教の王国だったころである。ブランマ、シバ、ビシュヌが3大神でシバは破壊を司る。

私はわが家のシバはヒンドゥー教とは関係なく日本犬の一種類であることを友人に説明した。友人は誤解を知り、照れ臭そうに笑いながら納得した。

※　　※　　※

シバがわが家にもらわれてくるとき、その件について、わが家では家族会議がひらかれた。飼育責任者、ひらたく言えば散歩係が誰になるかだ。ことのなりゆきから私がなるしかなかった。というのは、私が石場家に遊びに行ってちょくちょくタダ酒をくらって酩酊し、それが縁でシバをもらうことになったからだ。

飼犬に死なれて、その辛い思いから、もういやだと

いう経験の持ち主は少なくないだろう。わが家もその例にもれず、悲しい経験をしている。たかが動物と高を括ってはいけない。犬は飼主に死ぬまで忠実である。それだけに死なれるといたたまれない気持になる。

わが家には以前、コロという飼犬がいた。コロは捨て犬で幼犬のころ、小学生だった二男がつれてきた。小学校に行くと子どもたちから昼食時の残り物をもらえるので現れるようになったらしい。二男はそのころからコロと呼んで手なずけていたようだ。

そのうち夜になると、二男はコロが心配で食事を持って探しに行くようになった。小学校は運動会の歓声が聞こえてくるほどの、わが家からさほど遠くない距離にある。二男が名前を呼ぶとコロは暗闇の中から駆け寄ってきた。私も二男について探しに行ったことがある。

二男は自分で責任を持つからと、反対する母親に泣きながら訴えてコロの飼育を承諾させた。とはいっても、二男が留守のときは家族が交代で食事を与えたり散歩に行くのだが、これは家族としては当たり前のことである。コロは11年後のある日、夕方から突然苦しみ出し、動物病院へ行って注射を打ってもらい、持ち直したかにみえたが、翌朝未明、二男に抱かれて息を引き取った。朝飯をたいらげて昼頃までは普段と変わらなかったのにどうしたのだろう。医者は毒物を食べたと私たちに説明したし、もしかしたら毒殺されたのではないかと疑問に思い、警察に連絡した。後述するが、思い当たるふしがあった。

警察官が二人調べにきた。警察官は病院にも行って医者の話も伺った結果、病死ではないかと我が家に 連絡してくれた。医者は私たちに対するのと異なる説明をしたようだ。事件になるのを恐れてのことかもしれなかった。ヤブ医者の野郎と腹立たしく思ったが、医者がそう言うのなら仕方がない。二男はたしかに責任をまっとうしたのだった。

コロは雑種で牝、二男の友人が牡犬をつれて遊びにきたとき交尾し、4匹の仔犬を生んだ。そのあと避妊手術をしたのだが、仔犬は殺すわけにもいかないし、もらい手を探すのに難儀した。3匹はもらい手があったが、1匹はペットショップに預けた。欲しい客がいれば無料で分け与えているらしい。

二男は毎日、学校帰りにそのペットショップをのぞきに行った。道路をへだてた電信柱の陰から様子を伺っていると、ある日、親子連れがきてもらっていったという。二男はしばらくその親子の後をつけて行き、家に帰ってきてから、親切そうな親子だから安心したと話していた。もらわれていった仔犬が幸せに暮らすことを願うのは人情である。

しかし、とんでもないのがいて、むごい仕打ちをするのもいる。隣家にもらわれていった仔犬は子どもといっしょに入浴したりして滅茶苦茶にかわいがられて幸せに暮らしていた。ところが祖母と子どもがいなくなると夫婦で虐待がはじまったのだ。

家の裏側、そこはわが家の庭に面しているいるのだが、短いリードに括りつけたまま雨ざらしにして散歩にもつれていかない。犬は糞尿まみれになって夜となく昼となく悲鳴を上げつづけた。ストレスからか、ふさふさした赤毛が脱色し、縮れ毛になった。わが家では気の毒で胸が締めつけられ、一度注意したが、無視された。食事もあげたりあげなかったりで、わが家でこっそり与えるようになった。

挙句の果てに、犬が啼くと、私と同世代の教員をしている夫が怒り狂って、窓からジャガイモやナスやキュウリ、トマト、ときには生のカボチャを丸ごとぶつけるようになった。あきらかに動物虐待だ。

(以下続く)

根深　誠(ねぶかまこと)

*1947年、青森県弘前市生まれ。行動する文筆家。ヒマラヤ、白神山地、渓流釣りなどをテーマに著作多数。明治大学山岳部OB。1973年以来、ヒマラヤの旅と登山を続ける。ヒマラヤの未踏峰６座に初登頂。

国内では、白神山地の青秋林道計画に反対運動を起こし、世界遺産登録へと導いた立役者、などその活動も多岐にわたる。

1984年にはアラスカ・マッキンリーで行方不明になった先輩仲間の植村直己さんの捜索に参加。

1988年シャーハン・ドク初登頂。

1995年、日本人僧侶河口慧海の足跡を追った「遥かなるチベット(山と渓谷社)」で、第4回JTB紀行文学大賞受賞。

主な著書:「風の冥想ヒマラヤ」「ヒマラヤを釣る」「白神山地をゆく」「東北の山旅　釣り紀行」(いずれも中公文庫)、「チベットから来た男(岩波書店)」、「山の人生 マタギの村から(NHKブックス)」、「白神の四季(白水社)」、「白神自然観察ガイド(山と渓谷社)」、「みちのく源流行(つり人社)」、「風雪の山ノート(七つ森書館)など多数。

引用「一竿有縁の渓(七つ森書館)」、「ゴンボホリの系譜(無明社)」「白神自然観察ガイド(山と渓谷社)」より。ー編集G